

近江・滋賀郡の古代寺院

一 瓦積基壇、輻線文縁軒丸瓦の源流 一

寺岡 洋

はじめに

播磨の駅路・駅家と古代寺院について連載中でしたが、今回は近江の湖西を取上げます。たまたま近江へ出かける機会があり、また、最近書いたものと大津北郊の寺院は大いに関係があるので、この際書いておくことにしました（すぐ忘れる？）。

「瓦積基壇をもつ古代寺院―播磨編―」（『むくげ通信』262）で紹介した**瓦積基壇**、「伝路沿いの古代寺院」（『むくげ通信』263）で書いた石守廃寺出土の**輻線文縁**（ふくせんもんえん）軒丸瓦は、近江滋賀郡に居住した渡来系氏族が建立を主導した寺院と関係あると考えられます。

滋賀郡と大津北郊地域

近江国滋賀郡は、『和名類聚抄』（934年編纂）によると、北から真野・大友・錦織（にしこり）・古市（ふるち）の4郷からなっていた。

坂本（京阪石山坂本線の終点）付近から園城寺（三井寺）付近まで、約7kmばかりの間を大津北郊と呼んでおり、渡来系集団と渡来系遺跡の集中地域として広く知られている。

地形的には、六甲山と海（大阪湾）に挟まれた神戸の街を90度ばかり反時計回りにしたような立地で、山と琵琶湖の隙間という趣になる。

大津北郊の山麓には800基前後の群集墳が集中し、横穴式石室の多くは穹窿（きゅうりゅう ドーム）状の構造（通常は平天井）、平面正方形プランの石室（通常は長方形の石室）、ミニチュア炊飯具セットの副葬などが見られる。小河川の扇状地性低地部では大壁（おおかべ）建物や礎石建ち建物、オンドルなども検出され、これらの遺物・遺構は渡来系集団・氏族の集住によるものと考えられている。

志賀漢人（しがのあやひと） 大津北郊には志賀漢人と総称される漢人系の有力渡来氏族が知られる。8世紀末に志賀忌寸（しがのいみき）の姓（かばね）を得た穴太村主（あのをのすぐり）、大友村主、錦部（にしこり）村主などで、それぞれ多くの同族が知られ、

漢風横溢の地であった。

大津京四寺 大津宮は天智六年（667）、大津北郊に造られ、白鳳期の寺院跡は穴太（あのを）廃寺、崇福寺（すうふくじ）跡、南滋賀廃寺（錦部寺？）、園城寺前身寺院などが存在した。この四寺に囲まれた範囲が大津京の京域に想定されている。

■衣川（きぬがわ）廃寺 （国史跡 大津市衣川町2）

琵琶湖が最も狭まる地点の西岸、志賀丘陵端部に位置する。湖西線の傍ら。標高約106m、堅田平野南部から湖南地域がほぼ一望できる。現在、湖岸から西へ約900m離れるが、当時の琵琶湖の水位は標高87m辺りだそうで、汀線に近かったようだ（**塔跡：上図**）。

廃寺跡は、JR湖西線堅田駅から南へ線路沿いに約1.5km、史跡公園に整備されている。塔跡、金堂跡基壇が復原され、窯跡には展示スペースがあり、金堂基壇の土層剥ぎ取りが展示される。ちなみに、阪神甲子園～堅田間は80.1km。

衣川廃寺は、まず、北側の斜面地を造成して敷地を確保し、金堂基壇を版築（はんちく）により造り、南西斜面に造った瓦窯で瓦を焼いている。次いで塔基壇を造り、なぜかそこで終わってしまった。

金堂基壇 東西18m以上×南北15m

5ヶ所で礎石を据えた痕跡

塔跡基壇 一辺9mの方形、高さ約1.06m

礎石を据えた痕跡がなく瓦塔（がとう）の破片が出土したのみで、建物は建てられなかったようだ。

金堂・塔共に基壇化粧が確認されていない。

軒丸瓦とその系譜

軒丸瓦については「図録」[安土城考古博物館 2008]の解説を引用します。

i) 創建期のものとされる軒丸瓦は、大和の奥山廃寺や横井廃寺に類似する。

ii) 最も時代が下る一群には、**軒瓦の裏面や外周に格子目叩きを施す技法**が認められ、**南滋賀廃寺や穴太廃寺**等の大津宮造営に関係するとされる寺院と共通する特徴をもつ。ただ、大津宮関連寺院で出土する川原寺系軒丸瓦は出土しない。

iii) 山田寺系軒丸瓦は、弁端の反転を表現したハート形花卉になるタイプで、近江では異質な存在であるが、京都市の**北白川廃寺**など山背地域に類例ある。

iv) 衣川廃寺の存続期間は7世紀後半と考えられるが、創建年代については決定的証拠を欠く。

軒丸瓦から窺える衣川廃寺の造寺集団のネットワ



ークは単純ではなく錯綜しているようである。珍しい遺物に、塑像の螺髪（らほう）の範型がある。

■真野（まの）廃寺 （大津市真野1）

真野川南岸の比較的広い低位段丘上を選地しており、衣川廃寺より立地がよい。堅田平野一帯の地割の方位は斜行方位をとるのに対し、真野廃寺周辺の東西約460m・南北200mは正南北方位の地割が残る特異な地域になる。

衣川廃寺から北へ1.8km、堅田駅から北へ400mぐらいか。現状は道路建設中で地表に何も残さない。

想定真野廃寺の北にある中村会館には礎石と推定される石が残されている。

遺 構

道路敷設に伴い、おおよそ南北200m、幅20m、東に延びる枝道約40m、正確ではないが「ト」字状に道路予定地が調査された。「ト」の字の真中辺りに基壇状遺構、大型土坑、東側に溝、礎石、南側に瓦窯、埋没古墳3基などが確認された。

瓦窯は古墳の墳丘を利用したもので、お寺を建てる時にはまだ古墳が周辺に散在していたようだ。

遺 物

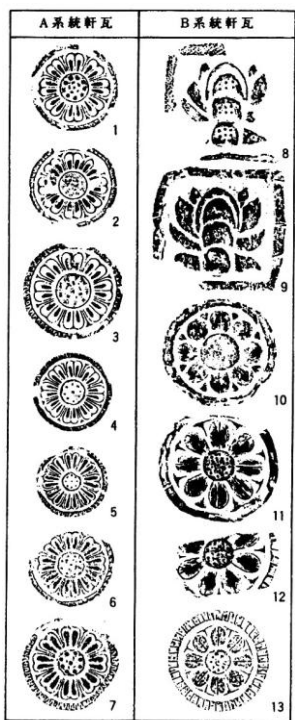
軒丸瓦・軒平瓦、塑像（そそう）の断片が出土している。瓦は「ト」字形の真ん中あたりで多く出土した。詳細は後日に。

■穴太（あのを）廃寺 （国史跡 大津市穴太2）

近江で最も知られ、かつ論議の対象になる古代寺院であろうか。

道路建設（西大津バイパス）に伴う発掘調査により同一場所に方位を違えて建替えられた寺院遺構が検出され、道路の橋脚の間に保存されている。

JR唐崎駅から北に300mくらい、京阪穴太駅からでも南に同じくらい。高架道路の下なので周辺の景観はよくない。



大津京内寺院の二系統の軒瓦
南滋賀廃寺 3・9・11・12、
榎木原瓦窯 1・2・4・5・8・10
穴太廃寺 6・7・13

四ッ谷（よつや）川によって形成された扇状地の南半地域、穴太駅から唐崎駅一帯は渡来系集団の集落遺跡として有名な穴太遺跡（注）。6世紀後半～7世紀前半の大壁建物やオンドルはよく知られる。

集落内の溝から木簡も出土しており、住民のレベルがずば抜けている。山裾には彼らの墓域である穴太飼込古墳群、穴太野添古墳群が形成されている。

遺 構

[創建伽藍] 主軸方位を真北から35度東に振る
伽藍配置 西に金堂、東に塔、北に基壇の痕跡
金堂の西に回廊

西金堂基壇 東西12.3m×南北14.3m

塔基壇 北西隅の一部のみ確認
東西5.2m以上×南北9.4m以上

基壇化粧 共に不明

北方建物 詳細不明 位置からみれば講堂？

[再建伽藍] 主軸方位を真北から2.5度東に振る

伽藍配置 法起寺式：西に金堂、東に塔、北に講堂
金堂基壇 東西22.4m×南北19.1m

金 堂 身舎（むさ）に四面庇がつく 類例まれ

塔基壇 東西辺約13.5mと推定

大量の瓦が落下した状態で検出された

2系統の瓦の同時併用を示す（＊左欄上図）

基壇化粧

金堂：瓦積基壇 右図

塔：瓦積基壇と推定

講堂基壇 東西28

.2m×南北15.5m

平安時代に造り直された可能性ある

遺 物（瓦を除く）

講堂周辺から銀製押出仏、金箔埴仏、塑像螺髪、青銅の風鐸など。

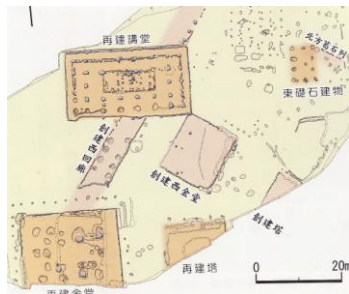
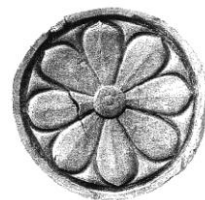
軒丸瓦とその系譜

「図録」解説にそって紹介します。

i) 軒丸瓦は3型式（Ⅰ～Ⅲ）に分類され、最古型式（Ⅲ 右図上）のものは、豊浦寺（とゆらでら 飛鳥寺に続いて建立された尼寺）や広隆寺（山背）の系譜を引く高句麗・新羅系の有稜素弁軒丸瓦。

範は異なるが同紋のものが隼上り瓦窯（宇治）で出土しており（右図下）、年代は7世紀第2四半期になる。広隆寺はいうまでもなく、秦氏が主導して建立した寺院であり、隼上（はやあが）り瓦窯も秦氏が関わった瓦窯と考えられている。宇治と湖西は瀬田川を介してつながっている。

ii) この最古型式の瓦の出土状況について、伽藍の北西側からの土石流に伴って流入したのか、創建

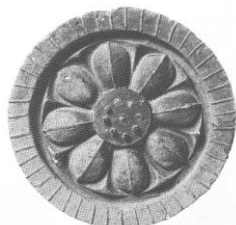


伽藍に葺かれた瓦かについて意見が別れる。流入であれば、穴太廃寺は現在知られる遺構よりさらに古い寺院、あるいは佛堂が想定される。

iii) 創建寺院には、大津宮周辺寺院に特徴的な大型の単弁八葉軒丸瓦もしくは**方形の「サソリ文」瓦**（Ⅱ型式。B系統と呼ばれ、大津北郊のみに見られる ***前頁左欄上段**）と素文軒平瓦をセットとして葺いたと推測されている（注）。

単弁軒丸瓦は**輻線文縁**のものが多い由（**右図**）。

iv) 再建寺院には、Ⅱ型式（B系統）に加え、畿内の主流派軒瓦である川原寺式系統の軒丸瓦（Ⅰ型式、A系統）と重弧文軒平瓦が併用される。



輻線文縁軒丸瓦

v) 再建寺院の年代について、従来は大津宮築造（667年）に合わせて再建されたという説が有力であるが、再検証が必要であるとされる。

vi) 「庚寅年」「壬辰年六月」と干支（かんし）による紀年がへう描きされた平瓦が出土し、製作技法などから庚寅年は690年、壬辰年は692年とされるが、630年・632年とする説がある。

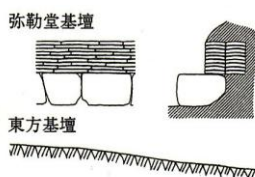
穴太廃寺創建と廃絶年代

7世紀前半には瓦葺きの仏教施設が建てられ、7世紀後半には創建寺院が建立されつつあったが、なんらかの事情で新たに寺院が同じ位置に建立され、平安時代まで維持されている。

穴太村主（あのうのすぐり）と同族

穴太史・穴太日佐（おさ）・穴太野中史・穴太など。

■大津市埋蔵文化財調査センター（大津市滋賀里1）
京阪滋賀里駅から山麓へ300mくらい。ぜひ立ち寄りたい（土日休館）。



■崇福寺跡

（国史跡 大津市滋賀里町）

調査センターのすぐ南から山に入る遊歩道がある。今回、案内標識しか見なかったの、関連事項のみ。



瓦積基壇・輻線文縁軒丸瓦

北尾根の弥勒堂は花崗岩の上に**平瓦を積んだ瓦積基壇**、その東方基壇では、類例の少ない**平瓦を合掌積みした瓦積基壇**（**右図上・中**）だった。



補修用とされる**輻線文縁軒丸瓦**（**上図 ↑**）。

■南滋賀廃寺（錦部寺?）

（国史跡 大津市南滋賀3）

大津宮・錦織（にしこおり）遺跡から北へ約1km離れた丘陵上に位置する。京阪南滋賀駅から西へすぐ。住宅街のなかに史跡公園が造られており、塔心礎、回廊の礎石などが残る（**右図**）。



伽藍配置：中門から回廊が西金堂・塔を囲んで講堂に取り付き、講堂の三面に僧坊を配する川原寺式伽藍配置とされる。

金堂基壇 東西22.7m×南北18.2m

西金堂基壇 東西13.3m×南北12.1m

塔基壇 一辺12.1m

講堂基壇 東西30.3m×南北15.2m

基壇化粧：**金堂・西金堂・塔**の基壇は基底部に割石を並べ、その上に瓦を小口積みする**瓦積基壇**（**右図**）。



単弁大型軒丸瓦・「サソリ文瓦」

創建期には、再建穴太廃寺と同じく川原寺式の複弁系瓦と、大津宮近隣寺院で特徴的な単弁系で大型の軒瓦（B系統）が使用され、少数しか出土しない**輻線文縁軒丸瓦**は補修用とされる。

南滋賀廃寺と榎木原瓦窯では、飛びきり珍しい方形軒丸瓦（**右図**）が出土している。蓮華文は蓮の花を上から見たものだが、横からみたデザイン（「側視形蓮華紋」）で一見サソリ風に見えるので「サソリ文」。瓦当が方形（四角）なので、丸瓦も方形丸瓦。西琳寺（羽曳野市）の鴟尾腹部には「側視形蓮華紋」が浮彫されている。渡来系の仏師・画師が関与したと考えられている。



「錦寺」と錦部寺

2012年、南滋賀廃寺の東約250mの畑で多くの須恵器や瓦とともに「錦寺」（**右図**）とへう描きされた9世紀末ごろの緑釉陶器片が出土し、注目された。



南滋賀廃寺は漢人系渡来氏族である錦部村主が建立を主導した「錦部寺」ではないかと推測されていたからである[大橋1990]。考古資料により文献を裏付ける重要な遺物である。錦部氏は、河内国の錦部郡・若江郡錦織郷に居住したものが、滋賀郡を始め近江各地に移住している。

*参考引用文献は「むくげの会HP」をご参照下さい

参考・引用文献

- 水野正好 1978「志賀郡所在の漢人系帰化氏族とその墓制」『考古学からみた古代日本と朝鮮』學生社
- 田辺征夫 1978「古代寺院の基壇一切石積基壇と瓦積基壇一」『原始古代社会研究』4 校倉書房
- 田辺征夫 1997「瓦積基壇と渡来系氏族」『季刊考古学 渡来系氏族の古墳と寺院』雄山閣出版
- 皇子山を守る会他 1985『穴太廃寺の保存を願って』
- ＊小笠原好彦、岡田精司、山尾幸久、水野正好、鬼頭清明、森郁夫氏の講演要旨を収録
- 仲川靖 1988「穴太廃寺の建立と再建の年代をめぐって」『紀要』第1号 滋賀県文化財保護協会
- 仲川 靖 2008「穴太廃寺に関する調査・研究の現状と課題」『滋賀県立大学人間文化学部研究報告 人間文化』23
- 大津市教育委員会 1989『穴太遺跡（弥生町地区）』大津市埋蔵文化財調査報告書（15）
- 宇治市教育委員会 1989『史跡 隼上り瓦窯跡』
- 大橋信弥 1990「錦部寺・国興寺・浄福寺」『紀要』第4号 滋賀県文化財保護協会
- 大橋信弥 1995「近江における渡来氏族の研究―志賀漢人を中心にして」『青丘学術論集』第6集 韓国文化研究振興財団
- 上原真人 1996『日本の美術 蓮華紋』至文堂
- 林 博通 1998『古代近江の遺跡』サンライズ出版
- 小笠原好彦 2000『近江の考古学』サンライズ出版
- 小笠原好彦 2005「穴太廃寺の性格と造営氏族」『日本古代寺院造営氏族の研究』東京堂出版
- 網 伸也 2005「日本における瓦積基壇の成立と展開」『日本考古学』日本考古学協会 第20号
- 安土城考古博物館 2008『仏法の初め、茲（これ）より作（おこ）れり』
- 寺岡 洋 2012『ひょうごの古代朝鮮文化』むくげの会

注)

オンドル・大壁建物など

余談になりますが、『穴太遺跡（弥生町地区）発掘調査報告書』「特殊カマド跡の性格について」という章では、注)に『むくげ通信』「槿域」が挙げられている。オンドルのことを書いたのである（99号 1986年）。今、合本を見てみると、一見して筆者が判明する水茎麗しい手書き時代。

守る会の人に頼まれ（水野さんのゼミ生→水野さん→飛田さん→むくげの会末端新入会員）、百済の王城である扶蘇山城（泗泚・扶餘）内の建物址オンドル施設の翻訳をしたような記憶が残る？

ちなみに、郡家（ぐんげ）遺跡（神戸市東灘区 阪急御影駅～阪神御影駅）ではオンドル状遺構（L字形カマド）、寒鳳（かんぷう）遺跡（神戸市西区伊川谷町）では大壁建物跡が確認され、寒鳳遺跡の少し上流になる上脇遺跡（神戸市西区）ではオンドル・カマドの煙突と推定される煙突形土製品の破片が多数出土している。

円形瓦当に方形丸瓦

穴太廃寺では「サソリ文瓦」の出土例はないようだが、方形平瓦が出土する。大型の単弁軒丸瓦に方形の丸瓦が付く例が南滋賀廃寺で紹介されており〔上原1996 p56 第135図〕、サソリ文瓦を想定しなくてもいいのかもしれない。

側視形蓮華文

華寺廃寺（伊香郡高月町）では、平瓦に「側視形蓮華文」が描かれている。〔安土城考古博物館 2008〕p85 219-3図

橙木原（はんのきはら）瓦窯跡

南滋賀廃寺の西の寺域に接して瓦窯が調査されている。大津宮時代に操業した5基の窖窯、奈良～平安時代の5基の平窯、工房跡が確認されている。

錦部寺

『続日本紀』天平神護2年（766）9月「官軍を助くる近江国の僧・沙弥および錦部・藁園の二寺の檀越、諸寺の奴等に物を賜ふ」